東方宗教（日本道教學會）129號 2017年

坂出祥伸著『江戸期の道教崇拝者たち ―谷口一雲・大江文坡・大神貫道・中山城山・平田篤胤』書評
日本近世思想における「方法」としての道教

松下道信

江戸時代、道教はどのように受容されていたのだろうか。本書、坂出祥伸著『江戸期の道教崇拝者たち ―谷口一雲・大江文坡・大神貫道・中山城山・平田篤胤』は、この問題を正面切って取り上げた論文集である。(1)

坂出祥伸氏は、主として養生思想や醫學・科學との關わりを中心に道教研究を進めてこられ、長らく斯學を牽引してこられた。多くの論著の中には、道教と日本文化との關係を概説した『日本と道教文化』（角川選書、二〇一〇）もあるが、本書は本格的に日本における道教の受容について論じたものといえよう。

まず本書の内容を簡單に見ておこう。本書は前後二篇に大きく分かれる。作者も「まえがき」で記しているように、平田篤胤に對する楠山春樹・安居香山・酒井忠夫・福永光司諸氏らによる一九七〇年代の議論を除けば、江戸時代の思想界における道教受容については、これまでほとんど檢討されてこなかった。前篇「大江文坡・中山城山・大神貫道などの仙教」はそうしたこれまでの空白を埋めるべく、江戸中後期を中心に活動した谷口一雲・大江文坡・大神貫道・中山城山といった人物たちの活動を取り上げる。

序説「江戸時代中後期における道典飜刻の盛行と背景としての老荘思想の流行」では、前篇で取り上げる人々の活動の背景として、江戸時代、朱子學的な立場に立つ林希逸による注釋を中心とした老荘思想が流行し、それが戯作の分野まで流行を見せたこと、そしてこれと呼應するように『列仙傳』や『性命圭旨』などの道書がかなりの頻度で出版されたことを指摘する。

第一節「江戸時代中期の「道士」谷口一雲の道教傳授―老子傳・道德經・金丹修煉など―」は、窪德忠氏による紹介文をふまえ、[2] 正德・享保年間に活動が確認される谷口一雲による「道教」講義について概説する。

第二節「江戸時代中期の戯作者・大江文坡が唱えた仙教」は、京都の人、大江文坡（一七二五頃-一七九〇）について取り上げる。大江文坡は眞宗の勸化本の作者であったと思われる人物で、異人の教示により道教に接近し、靈符・符呪・妙見信仰などへの傾倒を經て、「仙教」を提唱するようになる。これはいわゆる全眞教南宗、特に白玉蟾の內丹の修鍊法に據るものであるが、同時に日本の神々は神仙であるとして、神道を中心に据えた神佛儒の三教一致を説く。

第三節「攝津上宮の神官・大神貫道が著した道教養生書『養神延命錄』について―道教內丹説にもとづく神道的養生法―」は、吉田神道系の神主と思われる大坂上之宮の大神貫道（一七三一-一七八〇）の『養神延命錄』についての紹介。これは書名こそ陶弘景の『養性延命錄』に基づくものの、貫道自身の養生論を論じたもので、「神仙の道術」はもともとわが國に存在しており、天照大神から少名彦命へと傳えられたものだとして內丹を取り込んだ神道的神仙説を説く。[3] 附編として「『漢武帝內傳』『天隱子』和刻本について」・「道教內丹法の日本的神道的受容」の二篇を收める。

第四節「讃岐の儒者・中山城山の注解した道教存思法書『黃庭內景經略注』について」は、高松藩の儒者、中山城山（一七六二-一八三七）の『黃帝內景經略注』についての分析。中山城山は古文辭學を中心に醫學・國學などをも修め、儒・佛・國學を同じとする『三教一歸論』

を著している。本書は醫書としてではなく道書として『黄庭内景經』の存思法を注解したもので、『本朝神仙傳』・『本朝列仙傳』に見える人々を擧げ、やはり神仙術はもともとわが國にもあったとする主張が注意される。附編として「『黄帝内景經略注』原文・訓讀　附注解」を附す。

第五節「古本「五嶽眞形圖」を探求した人々―大江文坡・横山潤・平田篤胤―」は、江戸時代における「五嶽眞形圖」に關する出版について述べたもの。大江文坡が活動當初の呪符への關心から「五嶽眞形圖」に接近したのに對し、横山潤（一七四七-一七九九）は本草家として博物學的立場から同圖に接近したことが述べられる。一方、平田篤胤（一七七六-一八四三）は『五嶽眞形圖説』、および「五嶽眞形圖」の古形を載せる『天柱五嶽餘論』を著している。これは後篇に見える、古史傳の解明の一環としての中國神仙道への興味につながるものであろう。

後篇「平田篤胤の道教理解と受容」では、いわゆる國學四大人の一人、平田篤胤が中心に論じられる。上述の通り、篤胤の道教に關する研究はある程度存在するが、本書では一貫して道教受容の背後に潜む篤胤の意圖に肉薄しようとしている點が注意される。

まず序説「國學者としての平田篤胤の出發―「聖人の道」批判から道教への接近―」では、『呵妄書』から『志都能石屋講本』までを取り上げ、國學者として出發するにあたり、篤胤が儒教批判から神仙説へと傾斜していった流れを概觀する。

以下、これを受けて第一節「名醫は醫藥と呪禁を兼ねる―『志都能石屋講本』について―」では同書著述の眼目は、日本の醫藥方術がオオナムチ・スクナヒコ二神から始まる神醫道に發するという主張にあったこと、そして第二節「神仙家・葛洪への心醉―『葛仙翁傳』について―」における『葛仙翁傳』などに見られる葛洪への傾倒への檢討を經て、第三節「『傷寒論』は葛洪の從祖父葛玄の著か？―『醫宗仲景考』について―」では『傷寒論』の撰者とされる張仲景を、葛洪の祖父、葛玄に比定した意圖について探る。すなわち中國醫學とはもともと

オオナムチ・スクナヒコによる日本の神醫道が傳わったものであり、またそれは神仙道と密接に關係するものでもあるため、篤胤が尊崇する葛洪の從祖・葛玄に結びつけたのだとする。

第四節「天御中主神は道教の最高神・元始天尊―『黄帝傳記』について―」では、『黄帝傳記』において天御中主が元始天尊と結びつけられているのを始め、日本の諸神が道教の神々に比定される理由を檢討する。すなわち篤胤は、神仙道は神道が中國に傳わったものなのであって兩者は結局、一致すると考えているのであり、そこには篤胤の構築した神道説を中國の神仙説により根據づける狙いがあったとする。

第五節「唐土太古の三皇五帝は我が皇國の神々―『三五本圀考』『春秋命歷序考』など―」は、三皇五帝はもと日本の神々であるとするなど、『三五本圀考』・『春秋命歷序考』などの漢籍中の事物を日本にいわば附會する説について檢討する。

そして第六節「未完に終わった唐土太古傳復原の試み―絶筆『赤縣太古傳』について―」では、未完に終わった『赤縣太古傳』の著述の意圖を檢討する。ここでも篤胤は第五節に見えるような附會を全面的に展開するが、その理由として、中國の盤古神話に基づきつつ、西洋の萬物創世神話に對抗して、天之御中主から始まり伊邪那岐・伊邪那美へといたる展開を企圖するところにあったとする。かくして一見、牽强附會に見える個々の篤胤の言説も、その背後に日本の神々を中心とする統一的な世界觀を提示し、構築しようとしていたことが描き出される。なお本書の最後に初出一覽・あとがき・索引を附す。

以上、本書の前篇は從來あまりまとまって檢討されてこなかった江戸時代の道教の受容を、大江文坡ら四人を點描する形で論じた江戸期の道教受容に關する基礎的研究、そしてそれを後篇の平田篤胤の道教受容説の研究へとつなぐ内容となっている。もっとも前篇については點描とはいえ、例えば「眞一」を説く大江文坡が、「憑依型のシャーマン」（八十三頁）的要素を多分に持つ大神貫道の「仙教」を「外道法」として批判しているなど、

おぼろげにそれぞれの關係が浮かび上がってきて興味深い。後篇の篤胤が道家思想に傾倒していたことについてはこれまでもある程度指摘があるが、ここではそれが篤胤の道教に關する著作をほぼ網羅する形で行われる。また篤胤の道教の受容があくまで彼の神道説を支える一環として用いられていることにも注意したい。

ところで本書は道教を崇拜した人々を對象とするものの、その陰で神道あるいは國學という軸が貫通していることは注意せねばならないだろう。また評者の個人的な關心もあろうが、その際、垂加神道などの江戸期の神道諸派はもとより、特に吉田神道との關係については今後積極的に檢討する必要があるように思われる。

吉田神道は室町時代の吉田兼倶に始まるが、彼の代表的著作に『唯一神道妙法要集』がある。この書は、儒道二教および先行する兩部神道などに對してみずからの説く唯一神道、すなわち吉田神道の根源性を主張するもので、その視野の廣さと神道の純粋性への志向という點において、石田一良氏がいうように、先行する諸思想を「美しい體系に築き上げた神道史上稀にみる書物」である。(4) だが同時に本書は、唯一神道の思想的・實踐的あり方を補強するために道教、特に『北斗經』の援用へと向かうのであり、江戸時代を通じて吉田家は『北斗經』の祭儀、そしてそれと關連して内丹法を修養していたことが知られる。(5) これは本書に見える、吉田神道系とされる大神貫道の活動や、大江文坡の著した『本命元辰北斗七星神符傳』、また彼の妙見信仰などとも關連してこよう。

だが思想的にいかに美しくとも吉田神道は、文獻的考證學の地平に立つ國學から見れば、やはり道教や佛教などの諸思想を雜揉したものにすぎず、やがて本居宣長らの國學者たちにより嚴しい批判に曝されることになる。宣長自身も道教に對して佛教同樣、批判的であったという（二十五頁）。しかし宣長に私淑した平田篤胤は、本書が指摘するようにまた神仙説への關心を強く持つのであって、これは、吉田神道同樣、篤胤が自説を構築する際、儒教・佛教とは違う可能性を示す存在として道教が參照されていたということができよう。兼倶にせよ、篤

胤にせよ、神道が神道として儒佛に比して自説を構築する際、道教は一つの思想的な源泉としての役割を果たしていたのであり、ここに日本近代思想史における「方法」としての道教研究の必要性を指摘できるかもしれない。本書の内包する神道と道教の關係は大きな問題を孕んでいるといえよう。

あとがきによると、著者は早くから江戸時代の道教受容に對し關心を持っていたようだが、本格的に研究を再開したのは、關西大學を退任されてからのことであったようである。そして最後に著者は「八十一歳を過ぎた私には、これ以上研究を續ける體力はない。あとは若い方々が引き繼いでくださることに望みを託したい」（三五七頁）と記し、この文章を結んでいる。本書の成果を受け繼ぎ、發展させていくことは我々後進の研究者に課せられた責務であろう。特に日本における道教の影響については、まずは日本人研究者こそその責を果たさねばならない。我々に託された責任は大きい。

（四六判、三八四頁、二〇一五年十月、汲古書院、汲古選書七十二、四五〇〇圓（税別））

註

（1）本書については中前正志氏による新刊紹介がある（『日本宗教文化史研究』二〇卷一號、日本宗教文化史學會、二〇一六）。

（2）窪德忠「天理圖書館藏道教資料」（『ビブリア：天理圖書館報』十四號、養德社、一九五九）

（3）神名の表記は本書各章の表記に基く。

（4）石田一良編『神道思想集』（日本の思想14）、筑摩書房、一九七〇、十七頁。

（5）拙稿「淺談道教對於吉田神道的影響—以『北斗經』與內丹學說的關係爲中心的考察—」（趙衞東編『全眞道研究』第四輯、齊魯書社、二〇一六）參照。